

ISBN 978-4-903875-23-1

Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series 20

ユーラシア諸言語の多様性と動態－20号記念号－

ユーラシア言語研究コンソーシアム 2018年3月発行

Diversity and Dynamics of Eurasian Languages: The 20th Commemorative Volume

The Consortium for the Studies of Eurasian Languages

西夏語の双数接尾辞について

On the “dual” suffix of Tangut

荒川慎太郎

ARAKAWA, Shintaro

西夏語の双数接尾辞について

荒川 慎太郎

【キーワード】西夏語，双数，動詞句，動詞接尾辞，チベット・ビルマ語派

1. はじめに

西夏語は、動詞語幹に各種の接頭辞・接尾辞などが付加されることがある。人称代名詞の独立形と、人称接尾辞の「呼応」現象は、研究者の間で良く知られているが、接尾辞の中に「双数」を標示すると思われる要素があることは、西田（2004）の指摘以来検証が進んでいない。本稿では、この接尾辞を再検証するとともに、いかなる条件で出現するのか、筆者自身の仮説を述べたい。

2. 本稿に関係する西夏語の文法

2.1 西夏語と動詞句

西夏語は 1038～1227 年、中国西北部を支配した西夏国の言語である。西夏文字による大量の文献、主に仏典が残る。西夏滅亡後も西夏文字・西夏語は使われていたが、16 世紀の記録を最後に途絶えた。言語系統はチベット・ビルマ（以下 TB）語派に属する。地域的には同語派ではほぼ最北端に位置する。ギャロン系言語が系統的に近いとされるが、直系の後裔言語は確認されていない。

文法的には、「主語・目的語・動詞」、「指示代名詞・名詞・形容詞」の語順であること、必要に応じて格標識が使用されること、動作の方向・完了ほかを示す接頭辞、指示代名詞的接頭辞、人称接尾辞などを持ち、時に複雑な動詞句構造をとることが知られる。筆者は西夏語の動詞句について、最大で次のような構造を想定する。

表 1 西夏語の動詞句構造（理論上最大の場合）

{接頭辞 A-接頭辞 B-接頭辞 C}-動詞(語幹)-{接頭辞 A-接頭辞 B-接頭辞 C}-助動詞-接尾辞-助詞

接頭辞 A: いわゆる接頭辞 1, 2 と疑問接頭辞

接頭辞 B: 否定・禁止接頭辞

接頭辞 C: 指示代名詞的接頭辞

接尾辞: 人称・複数性接尾辞

※{ } 内の要素は、一つの動詞句内で共起しない。

ただし本稿では、疑問接頭辞、否定・禁止接頭辞、指示代名詞的接頭辞、助動詞、文末助詞、助動詞に付加される接頭辞、などには言及しないため、「接頭辞—動詞—接尾辞」という、簡略化した構造を前提に論を進める。

西夏語には、古代から現代までのチベット語、ビルマ語などには見られないものの、TB 語派の少数言語に存在する興味深い文法現象が、いくつか確認できる。知られているものの一つは動作の方向に関与する「方向接(頭)辞」であり、もう一つは動作者・被動作者の人称に関与する「人称接(尾)辞」である。

2.2 西夏語の方向接辞

西夏語研究者に、「方向を示す接頭辞 1」などとして知られている接辞がある。おおむね 6 種類の、異なる単音節からなる。実際の例文には明瞭な「動作方向」が確認できないものも多く、文脈的に「完了態」を表す機能が主と思われる例がほとんどである。一方、単に完了態表示機能であるなら、6 種もの接頭辞が使われる理由が求められなければならない。西田は「元来方向指示機能のみだったものが、完了態という時制表現に移行した」という仮説¹を、他の TB 語派言語の歴史の変遷とともに提案している。西夏語の接頭辞 1 は、他の TB 系少数言語に音形・機能が共通するものがある。

接頭辞 1 と同じ初頭子音を持ち、母音は同一（筆者は -e を想定）、機能としては「願望・希求」を表す、一群の接頭辞がある。これらは「接頭辞 2」と呼ばれ、西田らによって接頭辞 1 から派生した接頭辞と考えられている。

以上を一覧にして示すと以下ようになる。直接の系統関係にはないものの、機能・音形が近い方向接頭辞が TB 系の言語に存在する。ここではラヴルン(Lavrung) 語の例を挙げておく。

表 2 西夏語の動詞接頭辞 1, 2 の関係

西田(1989a: 419) による西夏語接頭辞のセット			ラヴルン語の接頭辞 ²	
来源となる方向	接頭辞 1	接頭辞 2	方向	形式
上の方に向かって	𐽧 ¹ a?-	𐽧 ¹ e:-	上	a-
下の方に向かって	𐽧 ¹ na:-	𐽧 ² ne:-	下	ne-
こちらの方へ(話者の方に向かって)	𐽧 ¹ kl:-	𐽧 ¹ ke:-	川上	ke-
あちらの方へ(話者から離れて)	𐽧 ² wl:-	𐽧 ² we:-	近距離低所	wə-
水源の方へ(内側に向かって)	𐽧 ² da:-	𐽧 ² de:-	(対応無し)	
下流の方へ(外側に向かって)	𐽧 ² rl:r-	𐽧 ² ryeqr'-	不定	rə-

¹ 西夏語の接頭辞については西田 (1989a: 418)、その他の TB 語派の言語については西田 (1989b: 806-807) などの仮説を参照。

² 白井 (2011: 52) 表 10 より。西夏語音に近いものを合わせて順序を入れ替えたが、「上下」以外の方向の対応は確実なものではない。また、西田の説く方向も「水源の方へ」「下流の方へ」などは、証明を経て確定されたものとは言い難い。

この組から外れるものとして 𪛗²di:- が挙げられる。研究者により機能・分類の見解³が異なる。

本稿に關係する接頭辞 𪛗¹ki:- の用例を紹介する。まず方向指示機能が含まれると考えられる例である。

(01)⁴

𪛗 𪛗 𪛗 𪛗
²wi¹kha¹ki¹ shi:
 城 CM Prefl 行く

(彼は)城内に行った (聖立 5, Arakawa 2014: 20)

𪛗¹ki:- は西田によれば「こちらの方へ(話者の方に向かって)」⁵の方向を指示する。しかし文脈上は「完了態」を表すのが一般的で、方向を示すとしても第一義的とは言えない。次は方向指示と考えがたい例である。

(02)

𪛗 𪛗 𪛗 𪛗
²yan¹chyu¹e:ki¹ gyu²dza:r
 衆生 CM Prefl 滅度する

衆生を滅度した(が) (金剛, 荒川 2014: テキスト編 224)

資料によっては、完了態を表すのに他の接頭辞が使用され、この 𪛗¹ki:- があまり登場しないこともある。例えば、『金剛經』で確認できる例はほとんど 𪛗¹𪛗¹「必定(かならず)」という形式の、熟語的な意味を表す。

2.3 西夏語の人称代名詞と人称接尾辞

西夏語の先行研究では、人称代名詞の独立形(および複数標識)と動詞接尾辞の間に「呼応」現象が確認できることが指摘されてきた。西田(1989a: 416-417)ほかの先行研究からその関係を整理すると、下のようになる(人称代名詞独立形は代表的なもののみ示す)。

	人称代名詞	人称接尾辞
1 人称	𪛗 ² nga	𪛗 ⁻² nga
2 人称	𪛗 ² ni:	𪛗 ⁻² na:
3 人称	𪛗 ¹ tha:	-Ø
複数	(代名詞・名詞)・𪛗 ² nI:	𪛗 ⁻² ni:

³ Кепинг (1985), Gong (2003)では接頭辞 1, 西田の最終的な見解(西田 2012)では接頭辞 2. 荒川は Arakawa (2012: 64)の考察結果から接頭辞 1 と同類とみなす。

⁴ 文法要素を□で強調, 適宜動詞語幹に下線。出典は略称と参考文献・頁を挙げた。

⁵ Кепинг (1985)は“toward”, Gong (2003)は“here, inside”と, 方向に関する見解が異なる。

実際の文で、人称代名詞と人称接辞の呼応を示せば次のような例がある。

(03)

𑖇 𑖇𑖇 𑖇𑖇 𑖇𑖇 𑖇𑖇 𑖇𑖇
²nga²syu¹thon¹hwan¹ma:²rvor²nga
 私 須陀洹 果 得る Suf.1sg

私は須陀洹の果を得る《私は》(金剛, 荒川 2014: テキスト編 234)

(01)で見たような「方向指示機能を持つ接辞」や(03)で見たような「人称代名詞と人称接辞の呼応」は、漢語やチベット語に対応する現象・要素が見られないため、翻訳仏典を扱う際注意が必要である(文脈で意味・機能を判断しなければならない)。一方 TB 語派言語の研究から見れば、古いチベット語やビルマ語に見られず現代の少数民族語にしか確認できない、上記の言語現象の、最古の文献記録という重要性を持つ。

3. 𑖇¹ki: の奇妙な振る舞いと西田による双数標識説

3.1 複数の機能・用法が確認できる 𑖇¹ki:

表 2 で挙げた 𑖇¹ki: は、他の接頭辞に見られない振る舞いをする場合がある。一つは特定の熟語・複合語の「後部」構成要素となる場合であり(04)、一つは動詞に「後続」しているとみなせる場合である(05)。また、機能的には共起しないはずの接頭辞 1, 2(?) が二つ、動詞に前接するという、「二重接頭辞」がまれに見られる。この時、前方に位置するのが 𑖇¹ki: であることがしばしばある(06)。

(04)

𑖇 𑖇
¹ldi:q' ¹ki:
 何 X

何を(いうのか) (天盛 15, Arakawa 2012: 62)

(05)

𑖇𑖇 𑖇𑖇 𑖇𑖇 𑖇𑖇 𑖇𑖇 𑖇𑖇 𑖇𑖇 𑖇 𑖇
²nga¹nI:²jyan²tse:¹e:¹vi:q'¹ny'e:²byi²lheu¹lda:q ¹ri:r ¹ki:
 私 Pl 菩薩 CM 幻 住する 解脱 明らか 得る X

私たちは、菩薩の幻に住するという解脱を證得して(?), (華嚴 77, 荒川 2011: 155)

(06)

𑖇𑖇 𑖇𑖇 𑖇𑖇 𑖇𑖇 𑖇𑖇 𑖇 𑖇𑖇 𑖇𑖇
²mI¹wi'²lhe? ¹tshu²ngo:r²ngo:r ¹ki: ²wI:²ka

死 生 受ける 趣 一切 X Pref1 離れる

死と生を受取る趣一切を離れる (華嚴 77, 荒川 2011: 206)

3.2 字書・辞典類における 𐵇 ¹kI: の説明

この要素 𐵇 ¹kI: について、西夏時代の韻書における説明、現代の西夏字典などの説明があるので、確認のためそれらを振り返る。

まず西夏時代の各種韻書に簡単な語義説明が残る。当該の文字は、西夏語音韻学で「平声第 30 韻⁶，牙音類」に所属する文字である（李 1997, 2008，文字番号 1326 より）。

A 『文海』⁷

𐵇 𐵇 𐵇 𐵇 𐵇 𐵇 𐵇 𐵇
¹kI: ¹ta: ¹na: ²wI: ²ri:r ¹ngir ²naq ²benq ²ngwu ¹li:
 TM CM 等しい語助である P
 𐵇とは 𐵇、𐵇 と等しい語助(=助詞)であるなり

B 『同音』

𐵇 𐵇
²wa ¹kI:
 何
 何を（いう，意味する）

C 『同音』丁種本背注

𐵇 𐵇
²naq ²benq
 語助
 語助(=助詞)

短い記述ではあるものの、西夏時代の学者も当該の要素が、1) 助詞で、他の接頭辞と共通の機能を持つ、2) 疑問詞と共起する、と認識していたとわかる。

対して、現代の字典類は十分な説明を与えているとは言い難い。推定音を除き原文を引用すると、Кычанов 2006 では、

「3048-0 𐵇 “служебное слово”, “grammatical word”, “虚詞”.」

李 2008 では、

「𐵇 1326 an auxiliary verb 已，所，雖，将也。(助)」

程度の説明に留まる。

⁶ この韻母の主母音は中舌狭母音[i]と推定し、Iで表記する。

⁷ 『文海』ではこの文字も含め9字が同一音節（荒川 1997: 42）。しかし他に「文法語」と見なせる語は無い。

3.3 目的格を表す要素としての 𪛗¹kI:

𪛗¹kI: は韻書『同音』の例のように、疑問詞に後続する例が見られる。

(07)=(04)

𪛗 𪛗

¹ldi:q' ¹kI:

何 X

何を (いうのか) (天盛 15, Arakawa 2012: 62)

3.2 の『同音』の例, (07)の例は、接頭辞として機能しているとは考えがたい。それらの例は、ともに「何をいうのか?」のような疑問文であるが、𪛗¹ldi:q' ¹kI:, 𪛗²wa ¹kI: はそれぞれ、「疑問代名詞+それに付加される助詞」と分析できよう。文脈的に疑問代名詞は動詞「いう」の項であるから、𪛗¹kI: は「目的語を示す格標識」とも仮定できよう。

さらに、疑問代名詞以外にも、この要素が後続すると仮定すると、

(08)=(06)

𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗

²ml ¹wi' ¹lhe? ¹tsheu ²ngo:r ²ngo:r ¹kI: ²wI: ²ka

死 生 受ける 趣 一切 𪛗 Pref1 離れる

死と生を受ける趣一切を離れた

→(08b)

[𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗] 𪛗 𪛗 𪛗

[²ml ¹wi' ¹lhe? ¹tsheu ²ngo:r ²ngo:r] ¹kI: ²wI: ²ka

[死 生 受ける 趣 一切]o ^{CM}Pref1 離れる

[死と生を受ける趣一切](目的語)を 離れた

のように、(08)のような事象は、「二重接頭辞」(Pref1-Pref1)ではなく「格標識+接頭辞」(CM-Pref1)と再分析でき、「同種の接頭辞の重複」という論理矛盾を回避できることになる。𪛗¹kI: を第一要素とする「二重接頭辞」はしばしば見られるが、𪛗¹kI: を「目的語・目的節を示す格標識」と見做せば説明できるものがある。

(09)

[𪛗 𪛗 𪛗 𪛗] 𪛗 𪛗 𪛗

[¹ryur ²ngo:r ²ngo:r ¹kha] ¹kI: ²wI: ¹ho?

[世 一切 間]o ^{CM}Pref1 出る

[*世一切間(世間一切)⁸]を出でて⁹ (華嚴 77, 荒川 2011: 202)

⁸ 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 「世一切間」のように活字が並ぶ。明らかに活字配列の誤りである。

⁹ 華嚴 77 では「𪛗 𪛗+動詞」が 3 例 (動詞は 𪛗 「出る」 2 例, 𪛗 「離れる」 1 例) 確認

ただし、これまで一般的に知られている「目的語・目的節を示す格標識」は 循 ¹e: 「～の, ～を(～に)」や 蕪 ²a 「～を, ～に」であり¹⁰, 黠 ¹kI: を格標識と認めるには、更なる用例の収集と検証が必要となる。

いずれにせよ、このように使用される 黠 ¹kI: は、本稿の主旨とする双数接辞とは無関係の要素と考えられるため、これ以上の議論は続けない。

3.4 「双数を表す動詞接尾辞」仮説とその検証

いくつかの資料においては、黠 ¹kI: が「動詞に後置される」例が、誤記とは思えないほどの頻度で確認できる。

(10)

循 鞞 斲 籊 循 鞞 翫 鞞 鞞 斲 鞞 斲
²nga ¹nI: ²ʃyan ²tse: ¹e: ¹vi:q' ¹ny'e: ²byi ²lheu ¹lda:q ¹ri:r ¹kI: ²thI: ²byi ²lheu ²ri:r ¹kI:

私 Pl 菩薩 CM 幻 住する 解脱 明らか 得る ㊦ Dem 解脱 得る ㊦

私たちは、菩薩の幻に住するという解脱を證得して(?), この解脱を得て(?) (華嚴 77, 荒川 2011: 155)

この要素を動詞接尾辞と仮定した場合、西田 (2004: 374-375) に提案される「行為者が双数である」接辞 黠 ¹kI: が関わりとされる。西田によればその要素は、本質的には人称は関与せず、主語・行為者が「二名」であることを指すという。

西田は『法華経』における使用例として、以下を挙げる。¹¹

A: 鞞 斲 籊 鞞 鞞 鞞 斲 斲 斲

何 故 邪 見 家 中 Pref 生 X 謂

「何の故に邪見の家中に生まれたるか (我等二人は)」 (法華 8, 西田 2005: 207)

B: 鞞 斲 斲 斲 鞞 斲 斲 斲

家 出 道 Pref 修 AV X 謂

「出家し修道せしめんと謂う」 (法華 8, 西田 2005: 208)

C: 鞞 斲 斲 斲 斲 斲

家 Pref 出 AV X

「願わくは (我等二人の) 出家をゆるしたまえ」 (法華 8, 西田 2005: 208)

できる。

¹⁰ 西夏語の格標識に関する筆者の見解は荒川 (2010 及び, 2014: 160-173) 参照。

¹¹ 下線, 和訳, 出典表記 (「法華 8」は『法華経』第八巻を示す) は西田による。筆者が A-E を付し、読者の理解を助けるため、当該要素を で示し、逐字訳を下部に付した。また例文の出典箇所を調べ、原文図版 (西田 2005) における掲載頁も示した。

D: 蕘 蕘 蕘 蕘 蕘 蕘 蕘 蕘 蕘 蕘 蕘 蕘

父母我等に家 Pref 出 AV X

「父母は我等（二人）に出家せしめたり」（法華 8，西田 2005: 209）

E: 蕘 蕘 蕘 蕘 蕘

華 清 聽 行 X

「法華を聴きに行く（我等二人は）」（法華 6，西田 2005: 118, 151）

西田は「（本来接頭辞であったが）仮借されて動詞の語尾の表現に使われている」「どの文もその主体，我等，実は我等二人，つまり二子であって，その双数に 蕘 ¹kI: は呼応しているのである」「おそらくこの形態は 1036 年（西夏文字創製の年）よりかなり以降に書写語に登場した形態であって，その使用例は限られた文献にしか発見できない」¹²と述べている。

ただし例文 A, B は当該の 蕘 ¹kI: が動詞「謂う」に先行するため，動詞接頭辞，あるいは 3.3 で解釈したような「目的節に対する格標識」と見なせる可能性も否定できない。E は『法華経』第 6 巻の一節で，写本・刊本に残る。図版でそれぞれを確認すると（西田 2005: 118 の最終行，同 151 の 15 行目），実は 蕘 ¹kI: の後に動詞「謂う」が存在する。すなわち，西田の例示では省略されているものの，実は例文 E も A, B と同様の文であり，同様の問題点が存在するといえる。加えて，以上の例の中で「我等」が表出するのは例文 D のみであり，それさえ「双数」とみなす根拠が明示されていない¹³など，十全な例文と見なすにはやや問題が見受けられる。

筆者はかつてこの「双数標識」という見解に懐疑的で，荒川（2011）では誤記，あるいは活字の配列誤りと考えていた。しかし誤記とするには少なくない例があり，また「この接頭辞と動詞の倒置」は他の接頭辞には無い現象だった。また，こうした「動詞+蕘 ¹kI:」の行為者を仔細に検討すると，「行為者は双数（二名）」と見做すのが妥当であることが分かった。(11)のような，行為者が双数である，はっきりした例文が存在したのである。

(11)

蕘 蕘 蕘 蕘 蕘 蕘 蕘 蕘 蕘 蕘 蕘 蕘

²nga ¹nI: ¹nyl¹dzwo: ¹leu ²thI: ¹vi:q¹'ny'e:' ²byi²lheu ¹nwI ¹kI:

我 Pl 二人 ただ この 幻 住する 解脱 知る Suf.du

我等二人はただ，この幻に住する(のを)解脱を知り（二人は）（華嚴 77，荒川 2011: 157）

¹² 西夏文字と（ ）は筆者が補い，推定音表記も筆者のものに揃えた。

¹³ D は西田の解釈では「目的語」の双数と双数接辞が対応することになる。しかし使役態の主語である「父母」も「二人」の双数であるから，どちらの双数に接辞が対応するか証明することは難しい。

前掲の例文(10)も、その主語は「童子・童女」という「双数」であることが確認できた。この例文は実は会話文の一部であり、それに先立つ行に

(12)

籛 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹𠵹𠵹𠵹𠵹 1'dzyen 1'zi:q 1'zi: 1'zi:q 1'menq 2'neu' 2'war 1'e: 2'naq 2'I:

時に童子童女は善財に告げて言う。(華嚴 77, 荒川 2011: 155)

とあるため、例文(10)の「私たち」は「童子・童女」という「双数」であるのは明らかである。

(10)'

𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹
2'nga 1'nI: 2'jyan 2'tse: 1'e: 1'vi:q 1'ny'e: 2'byi 2'lheu 1'da:q 1'ri:r 1'ki: 2'thI: 2'byi 2'lheu 2'ri:r 1'ki:

私 Pl 菩薩 CM 幻 住する 解脱 明らか 得る Suf.du Dem 解脱 得る Suf.du

私たちは、菩薩の幻に住するという解脱を證得し〈二人は〉、この解脱を得〈二人は〉(同上)

同様に、荒川(2011)で確認した「動詞+𠵹 1ki:の文もおける行為者」はほぼ「双数」であることが判明した。西田が「限られた文献」として挙げるのは『法華経』と『大宝積経』のみであったが、少なくとも『華嚴経』は、こうした用例が確認できる文献と言える。

4. 「双数」標識の出現条件について

4.1 「双数」標識の出現しない例外

双数標識は西夏文にとって義務的な要素であったのだろうか。実は、行為者が明らかに二名(双数)であるにも関わらず、この標識 𠵹 1ki: が確認できない例も見いだせる。

例えば『法華経』においては、

(13)

𠵹 𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹
1'chI: 2'zyonq 2'a? 1'na 1'lo 1'heu 1'lo 1'e: 1'twuq 2'li? 1'wi:

Dem 時 阿難 羅睺羅 各々 念 なす

その時、阿難・羅睺羅はそれぞれ、(次のように)考えた。(法華 4, 荒川 forthcoming)

(14)

𠵹 𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹 𠵹𠵹
1'chI: 2'zyonq 1'nyI' 1'tha 1'myor 1'denq 1'sha:q 1'zi:q 2'bi 2'du: 2'ka 2'ce: 2'lu 1'chya: 1'khI: 1'lyI' 1'tsa: 2'dzu'

Dem 時 二 仏 如来 七 宝 塔 獅子 座 CM 足 屈す 結座する

その時、二仏如来は、七宝(仏)塔(の中の)獅子座の上に結跏し座す(法華 4, 荒川 forthcoming)

では、確かに二名の行為者であるにも関わらず、双数標識は確認できない。

4.2 双数標識の出現する例の再検討

ただし、上のような例文は比較的一文が短く、行為者が誰であるか（そして双数であること）が明確である。一方、『華嚴経』の例文を再検討してみたい。

やや長文であるが、当該の標識が多く出現するのは本資料の冒頭部である。荒川（2011: 155-157）から当該の部分の西夏文・和訳のみ抽出する。

002-4¹⁴

𐽀 𐽁 𐽂 𐽃 𐽄 𐽅 𐽆 𐽇 𐽈 𐽉 𐽊 𐽋 𐽌 𐽍 𐽎

時に童子童女は善財に告げて言う。「善男子よ。

002-5

𐽀 𐽁 𐽂 𐽃 𐽄 𐽅 𐽆 𐽇 𐽈 𐽉 𐽊 𐽋 𐽌 𐽍 𐽎 𐽏 𐽐 𐽑 𐽒 𐽓 𐽔 𐽕 𐽖 𐽗 𐽘 𐽙 𐽚

私等は菩薩の幻に住するのを解脱することを明らかにし得て、この解脱を得て、(故に)

002-6

𐽀 𐽁 𐽂 𐽃 𐽄 𐽅 𐽆 𐽇 𐽈 𐽉 𐽊 𐽋 𐽌 𐽍 𐽎 𐽏 𐽐 𐽑 𐽒 𐽓 𐽔 𐽕 𐽖 𐽗 𐽘 𐽙 𐽚

また方(々の)世界一切は皆、幻に住する因縁により生じるなり。衆生一

003-1

𐽀 𐽁 𐽂 𐽃 𐽄 𐽅 𐽆 𐽇 𐽈 𐽉 𐽊 𐽋 𐽌 𐽍 𐽎 𐽏 𐽐 𐽑 𐽒 𐽓 𐽔 𐽕 𐽖 𐽗 𐽘 𐽙 𐽚

-切は皆幻に住する。業煩惱により生じるなり。世間一切は皆幻に住する。

003-2

𐽀 𐽁 𐽂 𐽃 𐽄 𐽅 𐽆 𐽇 𐽈 𐽉 𐽊 𐽋 𐽌 𐽍 𐽎 𐽏 𐽐 𐽑 𐽒 𐽓 𐽔 𐽕 𐽖 𐽗 𐽘 𐽙 𐽚

「無明」、有する愛等、続いて縁により生じるなり。法一切は皆幻に住する。

003-3

𐽀 𐽁 𐽂 𐽃 𐽄 𐽅 𐽆 𐽇 𐽈 𐽉 𐽊 𐽋 𐽌 𐽍 𐽎 𐽏 𐽐 𐽑 𐽒 𐽓 𐽔 𐽕 𐽖 𐽗 𐽘 𐽙 𐽚

「我見」等は種類の幻縁により生じるなり。三世一切は皆幻に住する。

003-4

𐽀 𐽁 𐽂 𐽃 𐽄 𐽅 𐽆 𐽇 𐽈 𐽉 𐽊 𐽋 𐽌 𐽍 𐽎 𐽏 𐽐 𐽑 𐽒 𐽓 𐽔 𐽕 𐽖 𐽗 𐽘 𐽙 𐽚

「我見」等は顛倒智により生じるなり。衆生一切(の)生、滅、老、死、

003-5

𐽀 𐽁 𐽂 𐽃 𐽄 𐽅 𐽆 𐽇 𐽈 𐽉 𐽊 𐽋 𐽌 𐽍 𐽎 𐽏 𐽐 𐽑 𐽒 𐽓 𐽔 𐽕 𐽖 𐽗 𐽘 𐽙 𐽚

憂悲苦惱は皆幻に住する。虚妄分別により生じるなり。国土一

003-6

𐽀 𐽁 𐽂 𐽃 𐽄 𐽅 𐽆 𐽇 𐽈 𐽉 𐽊 𐽋 𐽌 𐽍 𐽎 𐽏 𐽐 𐽑 𐽒 𐽓 𐽔 𐽕 𐽖 𐽗 𐽘 𐽙 𐽚

-切は皆幻に住する。顛倒、心倒、見倒、「無明」により現れるなり。声聞、

¹⁴ 「002-4」は当該の資料の「2 折り目、4 行目」を示す。以下同様。

004-1

𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗
 独覚一切は皆幻に住する。智断分別により成すなり。菩薩一

004-2

𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗
 一切は皆幻に住する。自ら調伏でき、衆生を教化する諸の行願法

004-3

𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗
 により成すなり。菩薩の衆会一切，変化し調伏する，諸の為すこと

004-4

𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗
 とは皆幻に住する。願智幻により成すなりと見る。善男子よ。幻境の

004-5

𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗
 自性は説く所ない(=不可思議である)。善男子よ。我等二人はただ，この幻に住する(のを)

004-6

𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗
 解脱することを知り余す。諸菩薩摩訶薩は，辺のない(=極まりない)諸事の幻網

005-1

𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗
 (の中)に入ることができる。我等は彼の功德業を知り，説くことがいかにできる (のか)

上記の「 」で分かるように，実は当該要素が現れるのは童子童女の発言部分であり，また比較的長文であるので，文中の動詞の主語が何者かわかりにくい部分である。一方，当該要素が現れないのは上掲の『法華経』のように短文で，行為者が判明しやすい部分である。

実は『華嚴経』でも，上記の例文に後続する次の一文「非会話文」では，明らかに行為者が双数であるにもかかわらず，当該要素が出現しないのである。

(15)

𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗
 'dzyen 'zi:q 'li: 'zi:q 'menq 'e: ²byi ²lheu ²je: ²rI:r 'tshe: 'jwa:
 時 童子 童女 自ら解脱 ある Prefl 説く 終わる

時に童子童女は自ら解脱することを説き終わる。(華嚴 77, 荒川 2011: 157)

(13), (14)は「行為者が双数であるのが明らかでありながら，双数標識が現れない」という例であったが，実はこれらも会話文中ではなく，地の文に登場する文であった。

やはり長文であるので、本稿では全文を挙げるのは省略するが、前掲の西田例文 A~E は全て会話文中に確認できる。筆者が現在までに発見した例は全て会話文中である。網羅的な調査をまたなければならないが、特に会話文中に現れるということは、西夏語の口語体を反映している可能性があるだろう。

4.3 小結—双数標識の機能と出現条件

以上を踏まえると、「𐰽 ¹ki: は動詞に後続し、行為者が双数であることを示す。ただしその出現は義務的ではなく、(会話) 文中で特に行為者が双数であることを思い起こさせる場合が多い」と結論付けられる。¹⁵

5. TB 語派における双数標識

この「動詞+𐰽 ¹ki:」による双数標示は、チベット・ビルマ祖語にあったのか、西夏(あるいはタングート・ギャロン系言語)にのみ見られる現象か論じることが難しい。しかし「動詞接尾辞による双数標示」、「k の音形をとまなう、双数または『対』という表現」は一部のチベット・ビルマ語派の言語に確認できる。

まず、ギャロン (rGyalrong) 語は動詞接尾辞の形で双数が標示されるが、その音形式は -ch (-Nch) である (長野 1988: 1387 を筆者が例文・グロス式に表記)。(16)

Chi-gyo kə-mə-Ndu-ch ko.

私たち 1du-Pref-V-Suf1du AV

私たち(二人)は到着するだろう

次に、アツィ (Atsi) 語やアチャン (Achang) 語は「人称代名詞」の形式に双数が存在し、その要素の音に -k が含まれるのが興味深い(それぞれ -nik, -nək) が、動詞接尾辞の形式による双数標示は確認されていない (藪 1988: 195, 西田 1988: 185)。

本稿では諸語の双数性と西夏語のそれを網羅的に対象とすることはしない。しかし仮に、ギャロン系言語と西夏語の祖型に、*¹ki (乃至接頭辞形*¹ki-) という双数接辞があったとすれば、*¹ki > -ki (西夏語においては中舌音化)、*¹ki > -ch (ギャロン語においては前舌母音の前で破擦音化・母音消失) という、蓋然性の高い音変化を指摘することが可能となるだろう。

¹⁵ 最後に当該の西夏文字 𐰽 について補足する。漢字の「双」のごとく、左右に同様の要素が並んでいるものの、この文字は「双」の意味は持たないし(西夏文字で「双」は 𐰽 (李 1997, 2008, 文字番号 5747)), 「二つのもの」というように「表意文字」として機能していた可能性も薄い(𐰽「以前」(李 1997, 2008, 文字番号 2458)のように、左右に同様の要素が並ぶ西夏文字は珍しくない)。

6. おわりに

𐵇¹kI: は、おそらくは来源の異なる、三つの用法（動詞接頭辞、目的語・目的節用？格標識、動詞接尾辞）を持つ。その中の一つの 𐵇¹kI: は動詞に後続し、行為者が双数であることを示す。ただしその出現は義務的ではなく、文中で特に行為者が双数であることを remind する場合が多い。また確認できるのが会話文中であることから、西夏語の口語体を反映する表現である可能性も高いことを指摘しておきたい。

また TB 諸語のいくつかと比較すると、ギャロン系の言語に音形・用法の類似する双数標識が確認できるため、TB 系言語の一つとして西夏語に双数標識が存在することは、言語系統的にも妥当とみなせるだろう。

本稿では過去に筆者の整理したテキスト、西田による用例の再検討のほか、若干の新資料を提示することに留まった。他の仏典、世俗文書からさらなる用例を収集することが、まず今後の課題となろう。もちろん現代語と異なり、適当な「双数」動作主の例文を集めることは難しい（例えば仏典における「比丘・比丘尼」「善男・善女」は一見双数に見えるが、文脈上は「複数」である）ものの、内容面からテキストの精査を続けたい。

他の TB 系言語の双数標示との比較も今後の課題となろう。「動詞+𐵇¹kI:」のような双数標示は TB 祖語にあったのか、西夏（あるいはギャロン系言語）にのみ見られる現象であるのかも今後検討したい。

出典略号

金剛：金剛般若波羅蜜多經（荒川 2014），華嚴：大方広仏華嚴經（西田 1975-77，荒川 2011），法華：妙法蓮華經（西田 2005，荒川 forthcoming），聖立：聖立義海（Arakawa 2014），天盛：天盛新定旧改律令（Arakawa 2012）

文法要素略号

AV: 助動詞, CM: 格標識, Dem: 指示代名詞, du: 双数, P: 助詞, Pl: 複数標識, O: 目的語, Pref1, 2: 動詞接頭辞第 1, 2 形式, Suf: 人称接尾辞, TM: 主題標識, V: 動詞, 1, 2sg: 1, 2 人称単数

参考文献

- 荒川慎太郎 1997 「西夏語通韻字典」『言語学研究』第 16 号: 1-151
 ____ 2010 「西夏語の格標識について」澤田英夫(編)『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所: 153-174
 ____ 2011 「プリンストン大学所蔵西夏文華嚴經卷七十七訳注」 *Journal of Asian and African Studies* 81: 147-305
 ____ 2014 『西夏文金剛經の研究』, 松香堂

- ____ forthcoming 『プリンストン大学所蔵西夏文妙法蓮華經』
 李範文(編)1997『夏漢字典』, 北京: 中国社会科学出版社 (増補修正本 2008)
 長野泰彦 1988「ギャロン語」 亀井孝他(編)『言語学大辞典 第1巻 世界言語編(上)』, 三省堂: 1385-1390
 西田龍雄 1975-77『西夏文華嚴經』I-III, 京都大学文学部
 ____ 1988「アチャン語」 亀井孝他(編)『言語学大辞典 第1巻 世界言語編(上)』, 三省堂: 183-191
 ____ 1989a「西夏語」 亀井孝他(編)『言語学大辞典 第2巻 世界言語編(中)』, 三省堂: 408-429{西田 2012 に修正再録}
 ____ 1989b「チベット・ビルマ語派」 亀井孝他(編)『言語学大辞典 第2巻 世界言語編(中)』, 三省堂: 791-822
 ____ 2004「西夏語文法新探」 林英津他(編)『漢藏語研究－龔煌城先生七秩寿慶論文集』, 台北: 中央研究院語言学研究所: 353-381{西田 2012 に再録}
 ____ 2005『ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部所蔵西夏文「妙法蓮華經」写真版(鳩摩羅什訳対照)』, 創価学会
 ____ 2012『西夏語研究新論』, 松香堂
 白井聡子 2011「ダバ語, ギャロン語, 周辺言語の方向接辞についてーアチャン語支における方向と起点の標示ー」『川西民族走廊の言語特徴に関する基礎的報告』, 名古屋工業大学: 41-62
 藪司郎 1988「アツィ語」 亀井孝他(編)『言語学大辞典 第1巻 世界言語編(上)』, 三省堂: 192-197
 ARAKAWA Shintaro 2012 On the Tangut Verb Prefixes in 'Tiansheng Code', *Тангуты в Центральной Азии: Сборник статей в честь 80-летия профессора Е. И. Кычанова*. Москва, Издательская фирма «Восточная литература»: 58-71
 ____ 2014 On the Tangut verb phrase in *The Sea of Meaning, Established by the Saints*. *Central Asiatic Journal* 57: 15-25
 Gong Hwang-Cherng 2003 Tangut. G. Thurgood and R. J. LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan languages*, London, Routledge: 602-620
 Кепинг, К. Б. 1985 *Тангутский язык. Морфология*. Москва, Наука.
 Кычанов, Е. И. (составитель), Аракава С. (со-составитель) 2006 *Словарь тангутского (Си Ся) языка; Тангутско-русско-англо-китайский словарь*, Kyoto, Faculty of Letters, Kyoto University.

本稿は, 科研費(基盤B課題番号25580087)「方向接辞」からみたチベット・ビルマ語系言語の諸相(代表: 荒川慎太郎), 及びアジア・アフリカ言語文化研究所 共同利用・共同研究課題『アジア文字研究基盤の構築1』の研究成果の一部である。

また本稿の一部は, 2013年12月14日, 大阪北野病院にて庄垣内正弘先生にご高聴いただいた, 病「院」演習「西夏語の『二重接頭辞』について」に基づく。ご病床にもかかわらず, 適切な助言をくださった先生に, 深く感謝の意を表します。

On the “dual” suffix of Tangut

ARAKAWA, Shintaro

Research Institute for Languages and Culture of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies

The Tangut morpheme 𑖇 'ki: has three functions: A) the most-common use, a verb-prefix indicating the direction of the action or perfective aspect. B) an element in idioms such as 𑖇 𑖇 “what is”. C) a verb-suffix functioning as a “dual” marker.

Although the late Prof. Nishida advocated the hypothesis of the “dual” marker (Nishida 2004 etc.), the attestations he adduces are insufficient. In this study, his examples are re-analyzed and further attestations are provided from some Buddhist texts of Tangut version (mainly, 大方廣佛華嚴經 *Buddhāvataṃsaka-nāma-mahāvaiṣṭya* and 妙法蓮華經 *Saddharma-puṇḍarīka*).

In the conclusion, the author argues:

- 1) The suffix 𑖇 'ki: functions as a marker expressing the “dual” persons of the action.
- 2) The use of the suffix is not obligatory. It is frequently missing in short or simple sentences, but is favored for long or complicated passages in which it is not otherwise easy for a reader to confirm the duality of the person doing the action.
- 3) The sound and usage of the suffix in question appears close to potentially cognate material in some Tibeto-Burman languages, especially Rgyalongic languages.